

Case Album あの頃

第12回 (最終回)

大畠一成 Kazunari Ohata

デンタルラボ・グロース

〒150-0042

東京都渋谷区宇田川町38-3 柄澤ビル 2 階

Tel.03-3428-2611

歯科技工士学校時代
(19歳)



◀ Wieland Seminarにて初めての
ドイツ語での講演 (1989
年, 29歳)



▲マイスター学校恒例の全日制 (青) 対夜間部 (黄) のサッカー
大会。左から6人目中段が恩師, H. Gründler 先生 (1989年, 29
歳)



マイスター取得直後の頃の講習会
(1991年, 31歳)。少人数制のため
時間が経つにつれ和やかな雰囲気
に



◀ マイスターフェア (マイスター証書授賞
式)。手工業界155種のマイスターの代表総
勢2,200人が集まる。全職種のマイスターの
なから、筆者が年間最優秀マイスター賞
を受賞した (1993年, 33歳)

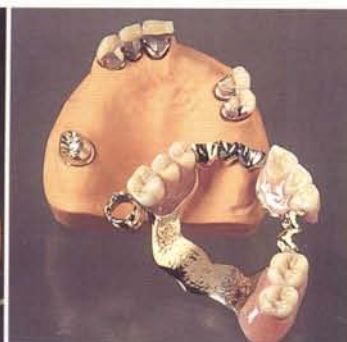
●ドイツで取り組んだ代表的テクニック●

■ガルバーノテクニック



1, 2 AGC ガルバーノ・テクニック(Wieland社) によって製作されたセラモメタル用ゴール
ドフレーム¹⁾ (1988年)

■ミリング



◀ 3, 4 マイ
スター試験で製
作したコンビ
ネーションデ
ンチャー²⁾
(1990年)



▲グレート・ニューヨークに参加。右か
らDr.Ch.Köhler氏 (Wieland社社長),
Herrmann夫人, Herrmann氏, 筆者
(1997年, 37歳)



▲現在 (40歳)

日本とヨーロッパの歯科技工への貢献を目指して志した ドイツ・歯科技工士マイスターへの道

「Hr.Ohata……!!」試験委員会が合格者名を読み上げる。仲間たちから歓声が沸き上がる。

1992年11月30日、筆者はドイツの歯科技工士マイスターの称号を手にした。歯科技工士マイスターには、歯科技工の技術や歯科的専門知識のみならず、財務・経済・法律・教育……といった幅広く、しかも深い一般教養が求められる。マイスター試験においてもこれらの筆記試験および口頭試験が占める割合は非常に大きい。

ドイツ語でのこれらの試験勉強には非常に苦労

させられたが、経営者・指導者には、リーダーシップとともに、ものごとを総合的・多角的にとらえ評価することができるオールラウンドプレイヤー的かつ総監督的な要素と資質が求められるのがドイツである。そのマイスターを目指して学んだことや、それらの知識に基づき幅広い見地からものごとをとらえる考え方は、帰国後の今日も、ヨーロッパ・ドイツとの比較考察のもとに、冷静に日本の歯科界・歯科技工界の行き先および自分のなすべきことを導き出すうえで役に立っている。



思いがけず(?)進んでしまった歯科技工士学校

あの頃わが家では家庭経済的に、高校後の進学は国立大学のみを受験に限定され、そのため筆者も3年生からは国立文系進学クラスに席を置いていた。そして大学受験を控えた高校3年の2学期の終わり、1人の同級生が「儲かる職業がある。下手な大学を出るより、よっぽど安定しているらしい」と蘊蓄を垂れた。その一言に釣られる同級生3人、2月には皆仲よく歯科技工士学校の入学試験会場へと向かう。

ただ、前夜から降り続いた雪が町中を埋めつくし、主幹となる国道に大渋滞を引き起こしていた。状況を前日から察知し、普段、車で約50分かかるところをおよそ1時間半の余裕をみて出発したにもかかわらず、試験会場に到着したのは試験開始後20分を経過したところであった。

受験番号から行き先の部屋割りを探る。掲示された受験番号の数字が、想像していたより大きい。

受験生約900名。「……ここって定員何人だっけ？」率直な疑問が湧いた。仲間の1人が「30人だぜ」安易に答える。とりあえず試験問題に直面しなければ埒が開かないことは重々承知しているが、会場へ向かう階段を登る足取りは軽快とはいえない。ただ、とにかく急いだ。

結果として、この一緒に試験を受けた筆者ら4人は、一次試験の筆記試験には90名の合格枠に全員残りはしたものの、最終的な合格者は筆者のみとなってしまった。母校となる岐阜県立衛生専門学校歯科技工学科の入学試験は2月半ば、国立一期の大学入試試験は3月半ばであったので、2月にはとりあえず行けるところは確保したように思えた。そして3月、国立一期校不合格。大学のキャンパスに熱い思いを抱いていた筆者にとって、これは由々しき問題であった。1978年のことである。



歯科技工に取り組むモチベーションとなった学生時代初期

●歯型彫刻から得たモチベーション

4月、とりあえず“歯科技工”というものとふれあうべく歯科技工学科に通い始めるが、当初約3カ月は“歯科技工”の体系がつかめず、挫折しそうだった。当時抱いた構想は「来年もう一度大

学入試に臨む」ことだった。

ある日、休みがちだった学校に足を運ぶと、そこでは岐阜大学医学部附属病院の沢田 守先生による歯牙解剖学の歯型彫刻のデモが行われていた。そこで見たものは、なんと石膏棒を歯の形に彫っ

てしまうという当時の筆者の常識では考えられない情景であった。

歯科技工士学校入試の二次試験では、石膏ブロックを幾何学的形状に彫刻するというこれに似た試験方法であり、筆者はなんとか彫り上げはしたが、最終的に要求された寸法とは相反するものであった。それをもっと複雑な歯牙を彫ってしまおうというのだから興味深々、眼を凝らして観察しているうちに、沢田先生の実践的かつ合理的な説明から「こんな方法があったんだ！」と新鮮な感銘を受けた。それからは歯型彫刻が好きになり、暇があれば彫ったものである。

こうしてモチベーションを授かった筆者は、おぼろげながら歯科技工にある程度真剣に取り組む決意を固めた。

人との出会いに恵まれ、渡独への夢をふくらませて研修と臨床に励んだ卒業後

1980年岐阜県立衛生専門学校歯科技工学科を卒業し、翌年まで母校に研究生として残った後、学生の頃からお世話になっていた安田永俊先生のもとでひたすら歯を作り、夜は人生勉強をする毎日を2年間続けながら、週末は東海歯科医療専門学校の専修科に聴講生として通った。——とにかく急いで幅広い歯科技工の知識を確立し、臨床に役立てなければと焦っていた。

その頃、母校の一期先輩の仲谷公司さん（現在、PDR代表取締役社長）から「大畠、名古屋で歯科技工をやってみるか？」と言われた。すぐに未知の世界に憧れる筆者としては、願ってもないチャンスである。お世話になった安田先生に「ドイツ・マイスターの称号を得るために頑張ってください」と辛い別れを告げ、名古屋へ旅立った。

名古屋では仲谷さんの紹介で、当時の東海歯科医療専門学校副校長であった坂 清子先生（現：ノリタケ・デンタル代表取締役社長）にお会いすることができ、そこで坂先生の歯科理工についての深い知識と情熱に触れる機会に恵まれた。そして臨床では、鈴木永吉先生のサンデンタル・ラボラトリーで技工の基礎から実践までをみっちり勉強することができた。

●ドイツの歯科技工への憧憬のはじまり

また、この時期に初めて「ドイツには歯科技工士マイスターというシステムがあり、歯科医師と協同ですばらしい技工作を作っているらしい」と授業のなかで知り、思いを馳せたものである。なにしろ高校時代、とびきり好きだった世界史のなかでも、もっとも興味を覚えた国はドイツだったのである。

当時、歯科専門誌からドイツの歯科技術面に関してある程度情報を得ることは可能だった。しかも斯界ではドイツの材料、器材が優れている事柄は、あまりにも有名にも拘わらず、一般的なドイツの歯科界のシステムの概観がどうしても浮かんでこない状況を撃ち破りたい心境が生まれていた。

平行して、夕方からは坂先生が企画されたポーセレン・トレーニングコースにて、ジョエルの久野富雄先生を始めとする名古屋の著名な諸先生がたからメタルボンド製作に関する理論と実際を教わった。朝から晩まで歯科技工に明け暮れた毎日だったがそれなりの充実感があり、自分なりにドイツに渡る前準備は十分できたと思い込んでいた。

1984年の残暑が終わり、秋風が心地良く感じるようになったある日、鈴木先生から「坂先生がノリタケのマーケティングでドイツに行かれるらしいけれど、『大畠君も一緒に行くかなあ？』とおっしゃっていたよ」と聞いた。すぐさま「すばらしい機会に恵まれた！」と感じると同時に、ドイツ語の準備がまだ全然できていない現実の自分が存在することに歯痒い思いを巡らせた。しかし、学生時代から思いを馳せた「歯科技工士としてドイツにいく」ということが実現するのである。仕事を早く終えたある晩、坂先生の自宅へ直接押し掛け、「ドイツへ連れて行って下さい！」——これが、筆者の渡独への道となった。

●山本 眞先生との出会い

さて、渡独の前にやり残したことが一つだけあ

った。それは、山本 眞先生の講習会を受講することだった。『ザ・メタルセラミックス』の著者で、ドイツを始め、世界的に有名な山本 眞先生のテクニックを間近で見たい、直接世界の話が聞きたいとずっと思っていた。当時ヨーロッパでは、桑田正博先生、田中朝見先生、そして山本 眞先生が活躍され、日本人歯科技工士のレベルの高さを十分アピールされていた。そしてそれによって、この頃ドイツ内のラボでは、日本人歯科技工士との積極的かつ直接的な接触を望む気運が満ちていた。

念願かなって参加させていただいた山本先生の講習会では、若年期、老年期、そして臼歯までの

陶材の基本築盛法から多色築盛法に至るまでの、すばらしく、かつスピーディーなテクニックに圧倒された。そしてなによりも、山本先生の驚くほどの豊富な知識と、歯を創ることへの情熱に感動を覚えた。

講習会後、親睦会が終わり、幸運にも京都駅へと向かうタクシーで山本先生と一緒できた。そして山本先生は、最後に「日本代表としてがんばってこいよ!」と励ましの言葉をかけてくださった。この「日本代表として……」という眞先生の言葉が、これまで筆者を支えてきたように思っている。



言葉の壁に孤立奮闘した渡独直後

●何も買えない……!?

そろそろ4月というのにまだまだ日本の真冬を思わせる寒さのドイツに到着したのは、1985年の3月末のことである。

50kgほどの大荷物をぶら下げて、ヨーロッパの古いレストランや飲み屋が立ち並ぶデュッセルドルフ旧市街の一角にあるホテルにチェックインしたのは、土曜日のまだ夜が明けだしたばかりの頃だった。部屋で少し休んでから、とりあえず生活に必要なものを買わなければならないので、午後になって右も左もわからないまま街へ出て、雑貨屋を探した。ところが、アーケード街はことのほか静まり返り、立ち並ぶ店々のドアはことごとく閉ざされている。不審を覚えながらも、とりあえず空腹を癒そうと、ブルスト（フランクフルトソーセージ）屋で焼きたてのソーセージを頬張りながら少し街を散策し、ホテルに戻った。渡独初日、その夜は泥のように眠った。

翌日曜日は今日こそ買い物に行こうと思っていたので、早起きしていそいそと出かけた。ところが、アーケード街は昨日よりも静まり返り、店々のドアはやはり堅く閉ざされていたのである。

後で知ったことだが、ドイツでは店で働く人びとが、ほかの人びとと同様に休みを取ることができるように、商店の営業時間は土曜日が午後2時までで、日曜日は完全閉店制だったのである。こ

うして渡独2日目も、買い物はできないままに終わった。

●Dental Studio GmbH Rolf Herrman

明けて月曜日は初出勤である。滞在していたホテルは、勤務先となるDental Studio GmbH Rolf Herrmanからすぐのところであり、モードショップの脇の螺旋階段を抜けた2階の扉を開けると、髭もじゃで頭髪はやや栄養不足だが割腹のよい、それでいて眼光鋭いRolf Herrmann（ロルフ・ヘルマン）氏の姿があった。

Herrmann氏は優しく筆者を迎え入れ、さまざまなサンプルケースやそのとき手がけていた臨床ケースを見せてくれた。どれもすべてオーラルリハビリテーションに近いケースばかりで、しかも、ところどころに自家製アタッチメントやテレスコープなどのミリングが施された高度な補綴物ばかりで、筆者の眼を輝かすには十分すぎるほどの質と量であった。

●言葉のストレスによる自己の揺らぎの克服

それからはほとんど毎日、フルマウスの補綴物を製作することができ、仕事のほうは有頂天になっていたが、とにかく同僚が何を言っているのか理解できないし、歯科医師や患者とのコミュニケーションなど考えられないような状況を、少しずつス

Case 1

ガルバーノクラウンによる2+2補綴

(1988年、デュッセルドルフ市・Dr. Schenck 氏との症例)



1-1 術前



1-2 術後。2+2
をガルバーノ・ゴ
ールドキャップを
フレームにしたセ
ラモメタルクラウ
ンにて補綴した。
ポーセレンは
Vintage (松風)
を使用

Case 2

ガルバーノクラウンによる1補綴

(1988年、デュッセルドルフ市・Dr. Schenck 氏との症例)



2-1 術前



2-2 術後。Case 1と同様のテクニックで補綴

トレスとして感じるようになった。

心理学のなかに「全く環境の異なる状況下で長く生活し、さまざまな体験を重ね、また、それが自らの意志とは基本的に相対するとき、自らが知らないうちにフラストレーションを持続することによって、あらゆる生活感覚に否定的障害を生じる」という理論がある。筆者も短いドイツの夏が終わり、そろそろ秋風が身体を刺すころ、上記の症状に見舞われた。回りの人間がすべて敵のように思えてきて、深い疑心暗鬼に陥ったのである。

その頃は、ひたすら自分を何かに没頭させようと、一生懸命仕事に打ち込むことで精神を集中さ

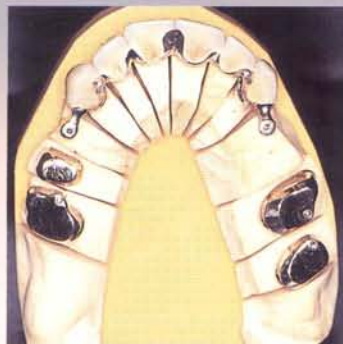
せ、夜はビヤホールに通い、隣で飲んでいるドイツ人と会話を弾ませる毎日だった。しかし、そのどうしようもない不安感も、渡独後1年足らずで消え去り、知らないうちにラボでの中心的な存在になっていた。

それからは、さらにドイツ語とミリングを学び、約3年で「これなら、マイスター学校を受験してもイケそうだなあ」とHerrmann氏にも認めてもらえるようになった。そしてそれに追随するように、ドイツを中心としたヨーロッパ各国での講演会、講習会、そして執筆活動が軌道に乗り始め、週末はほとんど家を空けることが余儀なくなった。

Case 3

リングとスクリューを用いたバイオメタルの半固定性セラモメタルブリッジ

(1995年、デュッセルドルフ市・Dr. Bartsch 氏との症例)



3-1 ミリングとスクリューを駆使して製作した半固定性セラモメタルブリッジの内冠の状態。合金は万能イエローバイオメタル Bio Geo Ti (Wieland)、ホーセレンはVintage Halo (松風) を使用



3-2 外冠部の適合状態 (同様のバイオメタルを使用し、一口腔内同一金属の補綴を目指す)



3-3, 4 口腔内装着



臨床を続けながら、死にものぐるいで勉強したマイスター学校時代

●「ミリングの神様」Gründler 先生が担任に！

1988年、筆者はデュッセルドルフの歯科技工士マイスター学校の入学試験に無事合格した。マイスター学校では、デュッセルドルフ大学のトップ教授Bottger (ブトゥガー) 教授とともに、日本にテレスコープシステムやチャンネルショルダーアタッチメントシステムを伝承した北ドイツの皇帝、ドイツで「ミリングの神様」と呼ばれるHorst Gründler (グリュンドラー) 先生のクラスに在籍が決まった。実はこのクラスは、Gründler先生にとっても最後の受け持ちクラスであった (先生は1994年にマイスター学校を定年退職)。筆者は先生から歯科技工に対する哲学を学べたことを非常に幸運・光栄に思っている。

●言葉のハンデに泣かされた「速記」

マイスター学校のコースには全日制と夜間フリ

ータイムコースの2つがあり、筆者は昼はそのまま勤務が続けられる後者を選択した。授業は言うまでもなくドイツ語で行われるが、筆者にとって最も難しかったのは「速記」だった。速記には、先生が口頭で述べる事項をすべてノートに素早く書き留めるという、非常に高度な技術を要するテクニックが必要となる。それにはドイツ語をもう一度、1から洗い直す必要性があった。

またもや、昼は臨床、夜はドイツ語、とほぼ1日中机に向かう日々が続いた。毎日曜日はクラスメートが筆者のために勉強会を開いてくれたり、歯科技工士である妻も、昼間の臨床を手伝ってくれたりして、さまざまな人たちが筆者を支えてくれた。

●模擬試験からのスパート

マイスター試験のおよそ3カ月前には、マイスター総合模擬試験が行われる。実技試験に関して

は、ラボでの実践をそのまま生かすことができれば問題ないと言われていた。しかし、筆記試験では素早い読解力と相対する知識が問われる。特に、法律学の民法、商法などは問題を読解するだけでも時間がかかるのである。それにもかかわらず、1問平均1分間で解答していかなければならない。模擬試験では、筆者が全問中半分ほど終えた時

点で、クラスのエリートたちは退出していった。時間いっぱい使っても80%の解答率だった。

それ以来、マイスター試験の前日まで、『マイスター筆記試験 1000問 問題集』を丸暗記したり、日本の民法、商法、労働法から、経済学、簿記に至るまで読みあさり、多方面からの知識と洞察力を身に着ける努力を必死に行った。

■ マイスター試験合格……！

マイスター試験当日。昨夜から降り続いた雨がやっと霧雨に変わったぐらいで、ドイツの雨期を知らしめるような愚図ついた朝だった。普段はトラムで通学するのだが、転んだ拍子に昨夜まで頭に詰め込んだ20~30問がこぼれ落ちてしまったのは困るので、ひっそりとタクシーで試験場に向った。

ドイツの歯科技工士マイスター試験は、下記のように総合的に4つの課程からなっている。

【専門課程】

：第1課程：専門実技試験（10日間）……①5歯以上にわたるアタッチメントを装備するコンビネーション義歯、②アタッチメント、またはスクリューを装備する10歯以上のセラモメタルブリッジ、③上下全部床義歯、④矯正装置（シュバルツ式デーン・プレート）。

：第2課程：専門筆記試験（1日間）……①補綴学（咬合学を含む）、②解剖学（ラテン語を含む）、③歯科理工・材料・器械学、④専門計算・カリキュレーション（請求書作成を含む）。

：専門分野口頭試験（1日間）

【教養課程】

：第3課程：一般教養筆記試験（1日間）……①財務・簿記、②経済学・社会経済学、③法律学（民法、商法、労働法）。

：第4課程：職業、労働上の教育学（1日間）……①職業教育概念、②職業教育の実践的プランとその組織化、③青少年心理学、④青少年の職業教育上の法律学（青少年心理学を含む）、⑤見習い養成実技試験（1日間）。

：一般教養口頭試験（1日間）。

そして、筆記試験が終わった。試験場を退出したとき、クラスメートが「カズ！大丈夫か？ 真っ赤な顔してたぜ！」と心配そうに尋ねる。「オーバーコンセントレーションしてたかな！？」筆者は結構クールに答えた。

最後の一般教養の口頭試験が終わると、マイスター試験委員会コミッショナーが5人集まり、合格者の名前が順に呼ばれる。「Hr.Lingweiler, Hr.Hanf……, Hr.Gatzweiler, ……Hr.Ohata, ……!!」一人ひとりの周囲で歓声が沸き起こる。マイスター称号取得の瞬間であった。1992年11月30日である。

Case 4

ガルバーノテクニックとミリングによるバイオメタルコンビネーションデンチャー

（1998年、デュッセルドルフ大学・Oä. Dr. Diedrichs 女史との症例）



◀ 4-1 外傷性咬合と歯の欠損によって垂直的咬合高径が破壊された状態

4-2 ガルバーノテクニックによって製作されたゴールドメタルフレーム。7 6 | 4 部はミリングによってテレスコープ内冠として使用





◀ 4-3 ダイレクトガルバーノテクニックで製作したガルバーノ外冠をガルバーノ内冠上に適合させた状態、ショルダー下部の薄いラインが境界線



4-4 前歯部に咬合挙上を図る、通常のワックスアップ法で形成し埋没、鋳造、適合させたバイオメタルフレームをガルバーノキャップ上にレーザーで溶接 (ATD-Tanakaレーザー機使用)



◀ 4-5 通常に応じてバイオメタルプレートを製作



4-6 同様のバイオメタル、Bio Geo Ti (Wieland社) を用い上部構造のテレスコープおよびチャネルショルダーアタッチメントを製作し、適合させた状態 ▶



4-7, 8 各種アタッチメント接合部を重複レーザー法にて、レーザー溶接する



4-9, 10 セラモメタル前装完成 (ポーセレンは Vintage Haloを使用)



4-11 可撤構造部の状態 (ゴールドキャップの滑らかなフリクションが可能となる)



4-12 下顎アタッチメントブリッジ



4-13 内冠部の口腔内装着



4-14 バイオメタルコンビネーションデンチャーの口腔内装着

Case 5

不良インプラント撤去後に施したガルバーノテレスコープデンチャー

(1998年、デュッセルドルフ大学・Oä. Dr. Diedrichs 女史との症例)



5-1, 2 来院時の口腔内の状態。不良インプラント上部構造が上顎、下顎ともに観察される



◀ 5-3 不良インプラント上部構造撤去術 6 カ月後、アトロフィーが進行した顎堤。口腔細菌臨床試験、咬合診断と患者の要望により、骨築造・インプラント補綴より可撤性義歯が妥当と診断

5-4 ガルバーノテレスコープ内冠 ▶



5-5 上顎フルデンチャー前歯部の既製陶歯の形態修正と再排列



5-6 発音を考慮した前歯部の配列（“F”と“S”が確実に発音できるように調節する）



5-7, 8 頬側面視（全歯セラモメタル前装）



5-9 下撤部内面の状態：純金のガルバーノ中間構造がソフトなフリクションを可能にする

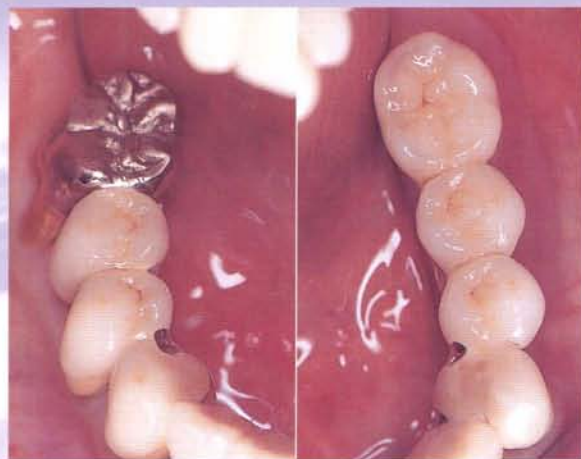


5-10 ガルバーノテレスコープ内冠装着の際には、ホシヨニングガイドを使用した確実な位置での固定が望まれる



◀ 5-11 (左上) 合着されたガルバーノテレスコープ内冠

5-12 (左下) 装着されたガルバーノテレスコープデンチャー (咬合面金属部は50 μ mのガラスビーズでサンドブラスト処理を行う)



5-13, 14 咬合面観

日本人のドイツ歯科技工マイスターとしての決意——日本の歯科技工界の向上のために

こうして1992年、筆者はドイツの歯科技工士マイスターの試験のすべてに合格した。マイスター称号を取得したことによって、ラボでは自動的に経営陣の1人としてマネージメントに関与することになる。

それからはドイツのマイスターとしてできることを積極的に模索した。そして「ドイツにいるからといって、ドイツ人になることは不可能だ。自分はドイツにいるからこそ日本人としてできることを、精いっぱい、誠意をもって活動することによって、ドイツをはじめ、全ヨーロッパ歯科界に貢献していこう」そう決心した。

そして、それからさまざまな波瀾が筆者を待ち受けていたが、「不安材料と戯れることのできる奴」「プレッシャーを楽しむことができる奴」を目指して自分なりに解決する方向を模索し、努力してきたつもりである。マイスターになってからも、まだまだ書き尽くせないできごとや体験が山ほどあったが、それらはまた機会があったら、後日まとめてみたいと思う。とにかくいつも、前を見つめて全力投球できる自分でありたいと思ってきた。

21世紀を迎えようとしている現在、世界的な経済の低迷と広範囲な財政危機の影響が斯界にも深く浸透している。そのなかでコストパフォーマンスを展開するためには、歯科技工界でも本来の医療的奔流から少々かけ離れた企業展開を期待せざるをえない状況に陥りつつある。

筆者は15年間、日本を離れ遠くドイツから母国を見つめてきた。日本とドイツはよく似ているとよく言われる。しかし、腰を落着けてよく見てみると、生活、文化、政治、経済など、どれをとってもその発想の角度の違いに驚かされる。ドイツの歯科界がどのように発展し、また、現在どのような問題を抱えた状況下におかれているのかを、日本の歯科界の実際と比較し、この両国間の差異による歯科事情の相違を考察することによって、将来の歯科技工業界の展開性と臨床の実際、そして、「人が本当に暮らす」とは何なのかがおのずと見えてくる気がしている。

昨年日本に帰国して活動の中心を母国に移したが、これからも、ドイツで得た歯科技工士マイスターの総合的な知識や技術、そして斬新な発想を



▲帰国後、Dental Labor GROSSを渋谷にて開設（本年8月）。ラボシステムはKavo-Master Spaceにて統一

融合させての日本独自の歯科技工学の確立と、そのさらなるグレードアップへの寄与を目標に、日々努力を続けていきたいと思っている。

本稿の執筆は、これまで過去を振り返ることをしなかった筆者にとって、知らぬ間に忘れていた初心を思い出させるに十分だった。

さまざまな人たちとの大切な出会いと、その方がたの協力が筆者を支えてくれた。その方がたに誌面から心から感謝申し上げるとともに、これからは筆者自身も、これからの斯界の若い人たちに夢を与えることができるよう努力する決意を

固めている。

最後に、読者諸氏の21世紀におけるご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

文献

- 1) 大畠一成, Diedrichs, G.: AGCガルバーノクラウンとVintage Halo Systemを融合した歯科技工の実践—デンタルチームとその成果。歯科技工学臨床研修講座5。医歯薬出版、東京、18～37、1997。
- 2) 大畠一成: Opening Graph—ドイツ・歯科技工士マイスター試験課程におけるミリングの実際。歯科技工別冊/ザ・ミリング。医歯薬出版、東京、2～7、1996。

Profile

1960年福岡県生まれ。1980年岐阜県立衛生専門学校歯科技工学科卒業。1980～1981年同校歯科技工学科研究生。1981～1983年安田病院歯科技工室室長。1982～1984年東海歯科医療専門学校歯科技工学科専修科聴講生。1984～1985年同校非常勤講師。1983～1985年サンデンタルラボラトリー勤務。

1985年3月渡独。Dental Studio GmbH Rolf Herrmannに勤務(1991年よりチーフマイスター)。1988年GFAマイスタースクールデュッセルドルフ入学。1989年Dental Technologieインストラクター。1989年Berliner Zahntechniker Tag (Quintessenz社)インストラクター。1989年St. Moritz Zahntechniker Kongress (スイス)インストラクター。1990年マイスター試験第1、2課程(専門課程)修了。1991年マイスター試験第3、4課程(一般教養)修了。日本人として初の歯科技工士マイスター称号取得。

テレスコープテクニックを日本に伝えたGrundler氏に師事し、ドイツデュッセルドルフ大学Diedrichs助教授と共同し、ガルバーノゴールドエレクトロフオーミングシステムの研究を行う。セラモメタルおよびオールセラミックスに至る審美補綴からテレスコープ、コーヌスデンチャー、総義歯に至るまで、グローバルかつオールマイティな歯科技工を目標としている。

以後、ヨーロッパを中心に多くの講演、講習、執筆活動を展開するが、1999年8月よりヨーロッパから母国日本へ活動の中心を移し、日本とヨーロッパを壮観した歯科医療への貢献を目標にEsthetik Laboratoly 雅を総括する。1999年2月三善由高氏の経営する有限会社クエスト内にてDental Labor GROSSを開設。2000年8月渋谷にDental Labor GROSSを独立開設。

Wieland社公認インストラクター(1986年より)。Shoufu GmbH社 公認インストラクター(1987年より)。1988年Bredent社顧問(1988年より)。1992年フランス国際歯科審美学会インストラクター。1993年イタリア国際歯科審美学会インストラクター。同年das dental labor Italia編集委員。同年AGC Auro Galvano-Gruppe (Wieland社主催)会員。1997年早稲田セラミックトレーニングセンター特別講師。1999年国際デンタルアカデミーラボテックスクール非常勤講師。2001年マスターセラミスト・スクール特別講師。